

種子島家墓地（御坊墓地）調査について

1. 御坊墓地の概要

種子島の島主種子島家の祈願寺であった華藏山^{（くらんざん）}慈遠寺（大同4年（809）開基とされる、明治初年に廃寺）に隣接した墓地。御拝塔墓地が詣り墓（墓参のための墓）であるのに対して、御坊墓地は埋め墓（亡骸を埋葬した墓）である（種子島開発総合センター鉄砲館「種子島の石塔展」、2021年）。

成立年代は不明であるが、「種子島家譜」（種子島氏の系譜を記したもので、【史料1】）によると、貞和2年（1346）3月18日に、6代島主種子島時充が「御坊（慈遠寺の上に在り）」で弓術を教えることを口実に、養子の又太郎を招いて酒肴を開き、これを酔わせて矢で射殺した記事が見られる。

御坊墓地には全18基の墓石が所在する。御坊墓地は種子島家だけの墓地ではない。敷地内には、種子島家関係者だけでなく、種子島に漂着した中国人や、種子島家家臣なども葬られていることがわかる【史料2・3】。また、天保9年（1838）7月には、種子島家墓地の墓域に石垣を築いている【史料4】。

なお、江戸時代末期には、【史料5】のような事態が生じたため、整備が行われた。

【史料5】読み下し

「慈遠寺御坊の某代の墓石、文字漫滅して某の墓なるかを弁ずること能はず。則ち某公の墓と爲すもの数基、唯口碑に、某公某公の墓ここに在りと伝うるのみ。祖母夫人、その遠久しくして逾その真を失わんことを恐る。ここに於いて、文字粗々存するものと、口碑の伝うる所は、則ちこれを採り、その余りの遡乎として掘るところを知るべからざるものは、則ち本源寺日因（監司）をして籤を墓前に掣かしめ、その籤の中る所を採りて、稱して某公の墓となす。又記録所に命じて、空域の図を作りて之を蔵せしむ。」（『種子島家譜』巻七十六『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ九』、安政7年（万延元年、1860）2月4日条）

（意訳）慈遠寺御坊の種子島家代々島主の墓石は、文字が磨滅して読めなくなってしまう、誰の墓であるか区別できないものがある。（島主の）某公と分かるものが数基と、言い伝えて「某公の墓はこれである」というものがあるのみである。（25代島主種子島久尚の）祖母夫人（23代種子島久道夫人松寿院）は、将来的に被葬者がさらに不明となることを恐れて、墓石の文字が大まかに残っているものと、言い伝えがあるものについては、被葬者を推定した。そのほかに、（被葬者の）根拠となるものが分からないものについては、本源寺の日因に墓前で籤を引かせて、その名前が出たものを採用してそれぞれの墓とした。また（種子島家の）記録所に命じて、墓地の図を作って、これを保管させた。

このように、23代島主種子島久道の夫人松寿院によって、安政7年（1860）2月に御坊墓地の整備が行われた。現在の御坊墓地の看板に記されている墓の被葬者名は、この記述を基としている。【写真1】

2. 墓地の特徴

【表1】御坊墓地の被葬者一覧

No.	刻銘	被葬者名 (□ は墓による比定)	命日 (□ は文献により比定)	材質
1	-	〔伝5代種子島時基〕	〔観応3年(1352)正月29日〕	溶結凝灰岩
2	-	〔伝5代種子島時基夫人〕	〔(年代不詳)9月3日〕	溶結凝灰岩
3	-	〔伝6代種子島時充〕	〔応永3年(1396)正月29日〕	溶結凝灰岩
4	-	〔伝6代種子島時充夫人〕	〔応永19年(1412)6月26日〕	花崗岩
5	-	〔伝7代種子島頼時〕	〔貞治5年(1366)4月16日〕	花崗岩
6	世尊院日愨居士	16代種子島久時	慶長16年(1611)12月27日	黄色溶結凝灰岩
7	-	〔伝7代種子島頼時夫人〕	〔応安6年(1373)7月8日〕	溶結凝灰岩
8	-	〔伝8代種子島清時夫人〕	〔(年代不詳)3月14日〕	溶結凝灰岩
9	法性院日勝	14代種子島時亮	天正7年(1579)10月2日	黄色溶結凝灰岩
10	-	〔伝10代種子島幡時夫人〕	〔宝徳4年(1452)4月14日〕	砂岩
11	-	〔伝13代種子島恵時夫人〕	〔天文18年(1549)9月27日〕	花崗岩
12	-	〔伝16代種子島久時夫人〕	〔元和9年(1623)9月19日〕	溶結凝灰岩
13	-	〔伝8代種子島清時女 妙法寺比丘尼〕	〔(年代不詳)正月17日〕	溶結凝灰岩
14	-	〔伝8代種子島清時男 慈遠寺住持日恵〕	〔明応2年(1493)11月15日〕	溶結凝灰岩
15	叙性院日基居士	19代種子島久基男 時純	享保15年(1730)8月2日	黄色溶結凝灰岩
16	閑詮院妙真日浄大姉	19代種子島久基女(於真)	寛延3年(1750)3月12日	黄色溶結凝灰岩
17	宝光院一心宗有日輪大居士	種子島又太郎(六代時充養子)	〔貞和2年(1346)3月18日〕	黄色溶結凝灰岩
18	受封院殿日開大居士	初代信基	不明	黄色溶結凝灰岩
	温良院殿日恭大居士	2代信式	不明	
	泰山院殿日仰大居士	3代信真	不明	
	天遊久長大禪定門	4代真時	〔(年代不詳)23日〕	

(本報告では、墓石の被葬者名が推定されているものについては「伝」を付した)

(1)被葬者について

全18基のうち、刻銘によって被葬者が判明するのは6基、9名(太字部分)である。内訳は、初代から7代、14・16代の種子島家島主、5代から8代、10・13・16代の島主夫人、6代時充の養子、8・19代の子である。このうち、No.15・16は鹿児島で亡くなっており、遺骸は鹿児島県の正建寺に葬られているため、墓は詣り墓と考えられる。なお、14代時亮・16代久時については、御拝塔墓地にも墓石が所在する。

(2) 墓石の配置

墓地正面から見ると、逆L字型の配置をしている。墓石の間は、大半が約10～30cmと狭い【図1】。もう一つの種子島家墓地である御拝塔墓地は、南北に横三列で、約60～180cmと間隔を取った配置となっており、対照的である【図2】。

(3) 墓石の向き

No.18の合葬墓（西向き）を除いて、全て南向きとなっている【図1】【写真2】。

「種子島家譜」巻七十六【史料5】によれば、「四公（初代信基・2代信式・3代信真・4代真時 一作成者注）葬むる処を知らず、万延二年辛酉四月、石一基を創立して之を合祀す」とあり、松寿院が御坊墓地を整備した翌年の万延2年（文久元年、1861）4月に造立、設置したことがわかる。

(4) 墓石の法量について

台座を除いて最も高いものは、No.11の伝13代種子島恵時夫人の墓石（五輪塔）で、210.1cmである【写真3】。最も低いものは、No.5の伝7代種子島頼時の墓石（宝篋印塔）で、74.3cmを計る【写真4】。

(5) 墓石の形状について

五輪塔が10基と最も多く、次いで笠付方柱墓4基【写真5】、突頂方柱墓2基【写真6】、平頂方柱墓1基【写真7】、宝篋印塔1基となる。五輪塔は形状が古く、14～15世紀の造立と推測される。

(6) 墓石の石材について

溶結凝灰岩製が8基【写真3】、黄色溶結凝灰岩製6基【写真5】、花崗岩製3基【写真4】、砂岩製1基【写真8】となっている。

①溶結凝灰岩：降り積もった火山灰や軽石がかたまってきた岩石となったもの。

②黄色溶結凝灰岩：岩片や軽石を含む火砕流堆積物。指宿市の山川福元で産出する「山川（やまがわ）石」に似ているが、同市で産出する池田石や大谷石にも似ている。

③花崗岩：粗粒で、粒のそろった岩石。主に石英・カリ長石・斜長石・黒雲母からなり、角閃石や白雲母を含むものもある。花崗岩は種子島では産出しない。そのため、島外から運ばれたと考えられている。

④砂岩：石英、長石、岩石片などの砂粒が固まってできた堆積岩。

(7) 伝6代種子島時充夫人墓（No.4）について【写真9】

花崗岩製の五輪塔。高さ105.7cm、幅40.7cm、奥行40.8cmを計る。五輪は宇宙のすべて

を構成する五元素のことで、空・風・火・水・地を指す。五輪の四面に、それぞれ梵字「キヤ」「カ」「ラ」「バ」「ア」を刻む。石材は兵庫県六甲山系の御影石と推測され、本州・四国から東九州を南下するルートでもたらされたと考えられる『西之表市史』上巻)。また、令和5年(2023)の海邊博史氏(堺市博物館学芸員)らの調査により、地輪正面に「建武三丙子ノ[]」「七月十九日ノ阿口日口口」の刻銘があることが判明した(海邊ほか「種子島の中世石造物」『日引』19号、2024年)。しかし、刻銘にある建武3年(1336)7月19日は、時充夫人の没年月日である応永19年(1412)6月26日と整合しない。

なお、建武3年に没した種子島家関係者は、管見の限り不明である。

(8) 葬礼の場としての御坊墓地

最後に葬られたのは、19代久基女(No.16、寛延3年(1750)3月12日鹿兒島にて没)となる。墓域が狭小なためか、この時期と前後して「葬礼」の場としての性格を帯びてくるようになる。

- ①享保7年(1722)3月21日、18代久時(2月15日鹿兒島にて没、世雄院日尊大居士)の遺髪を「本源寺西之地」に葬る。「葬式」は「御坊」で行う【史料6】。
- ②文化12年(1815)2月8日、22代久照(本光院日瑞大居士、文化11年12月11日鹿兒島にて没)の遺髪が到来し、「葬礼」を「御坊」で行う。遺髪は「本源寺墓所」に葬る【史料7】。
- ③文政10年(1827)7月9日、22代久照夫人清孝院が種子島の「下邸」で死去する。同月晦日に「本源寺出棺」し、「慈遠寺境内御坊」にて「葬礼」を行う【史料8】。
- ④文政12年(1829)7月3日、23代久道(5月13日鹿兒島にて没、放光院日悟大居士)の「葬礼」を「慈遠寺境内御坊」にて行う。遺髪を「本源寺」の「石棺中」に納める【史料9】。

おわりに

赤尾木港の修築に際して、神仏と並び祈願の対象とされる「御先祖」「御坊」【史料10】